Living device

Step up
「あたらさん」的 生活考

【あたら 可惜】とは「もったいない」の古語で「あたらしい」の語源になったといわれています。【あたら＝もったいない】に【さん＝SUN＝太陽】の恵みをプラスして、さまざまな情報を発信しています。

大正12年開業・木造駅舎が町の歴史遺産に。
―2019年、軽井沢ブルー・プラークに認定―

江戸のころ碓井三宿（追分、沓掛、軽井沢）のうちでは、最も栄えたといわれる追分宿。明治になって鉄道が敷かれる際、追分村では「機関車なんかが通ったらヤギの乳が出なくなる。鶏が卵を産まなくなる！」と反対派が賛成派と激突し、村を二分しての大騒動に。結果、汽車は軽井沢から追分を素通りして御代田へ。追分宿は衰微の一途…。

開通から遅れること21年、明治42年に夏の間だけ「追分仮停車場」が誕生。村人は「常設駅に！」と陳情を続け、「鉄道のせいで追分宿が寂れた」と同情する鉄道院副総裁・長谷川謹介の鶴の一声!?で、開業に至ったと伝えられます。

かくして1923（大正12）年10月、標高955・6mの高原に念願の駅が誕生します。浅間山の勇姿を目前に山野草が咲くホームや待合室の風情が多くの文学者や文化人の心を動かし、詩や小説に登場。『高原の駅よ さようなら』という映画の舞台にもなりました。そんな由緒ある駅として、風雪に耐えてきたのに、私の記憶する限り、信濃追分駅は還暦・古稀・傘寿・卒寿と一度も祝福されずに佇んでいます。

あと3年後の百寿（100歳）を迎えた時には盛大にお祝いを！と考えていたところ、昨年、軽井沢町から「町内の歴史的な価値を持つ建造物」として認定され、ブルー・プラークという銘板が与えられました。これはイギリスで150年前に始まった制度ですが、歴史遺産として継承し保存して頂きたいとの思いのこもった銘板で、信濃追分駅は晴れて町のお墨付きとなりました。『高原の駅よ 永遠に！』。

かつて貨物列車も利用した261mの長いホーム。今は2両編成がほとんど。

降り立てば高原の風。出会い、別離、旅立ち、ここから数々の物語が。

乗車券の回収ボックスの上に掲げられた銘板。駅は土地と人の歴史を刻む。

那須 由莉：らぴす舎・代表

多くの家庭実用書や生活情報誌の編集に携わる。2005年『暮しの手帖別冊・あたらさん』の編集長として、創刊と同時に「しなの鉄道・信濃追分駅」駅舎に「あたらさん編集室」を設置、別冊の休刊後も継続して駅舎を借り、現在に至る。「もったいない＝あたらさん」の知恵と心をコンセプトに、編集・制作と創作活動を続ける。信濃追分駅「オオヤマ桜を守る会」、軽井沢・借宿「ビオトープKBS」のメンバー。

情報募集・問合せ先　制作・発行：『めづるくらし』研究会　発行人：田邊 早苗 ／ 編集人：柳谷 廣之
HP：http://meduru.webcrow.jp/index.html　E-mail：medurukurashi@gmail.com
©"MEDURU KURASHI" Project Team 2020 ＊本書の無断転載、無断複製（コピー）を一切禁じます。
◆ この事業は<神奈川県社会福祉協議会　地域福祉活動支援事業助成金>で運営しています。